

主 題：選ばれなかった民3

聖書箇所：ローマ人への手紙 11章7-10節

盲目の詩人ファニー・クロスビーが「わが心の歌」と呼ぶ詩があります。彼女が不安を覚えるときに、この詩を何度も繰り返すことによって心に平安が宿ると彼女は証をしています。彼女が愛したその詩は「死」についてのものです。「私が死から目ざめるときの喜び、王の王宮の中に私はいる。」と言います。「死が訪れるときが来る。それがどれだけ近いか分からない。しかし、天に私の住まいがあることを知っている。また、死を迎えるとき、私のすばらしい主が言われる、『よくやった』』と。そして、私は安息に入る。」、コーラスの部分は日本語の訳が非常に上手く訳されていると思います。「御顔を拝して我は告げまつらん。恵みにわが身も贖われたりと」。私たちイエス・キリストを信じる一人ひとり、例外なく、イエス・キリストの前に立つ時に、この神のすばらしい恵みを称える者になります。イエスの前に立つときに私たちは、私たちをこのようすばらしい救いへと招いてくださったその神の恵みを覚えて、その神を心から誉め称えます。もちろん、その目的で今私たちはここに集まって来ている訳です。私たちの恵みの主を心から感謝し、心から崇めるために。

「神の恵み」、パウロはそのことをみことばを通して私たちに繰り返し教えて来ました。私たちはみな例外なく、パウロが言うように「生まれながらに神の御怒りを受けるべき」存在だったのです。どこを見ても神が喜んでくださるところがないのです。なぜなら、私たちは主なる神を無視して、主に従うのではなく、反って、主の敵であるサタンに従い、自分の思いのままに好きなことを、自分の肉欲を満たすためにだけに生きてきた者です。しかし、驚くべきことに、救われる価値のまったくない私たちを神は一方的にあわれんでくださり、私たちを愛してくださり、そして、キリストとともに私たちを生かしてくださったのです。エペソ人への手紙2章のパウロのことばをそのまま使うなら、「キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」(2:6)、つまり、パウロが言いたいことは、どこを見ても救われる資格のない私たちに対して、神が成してくださったみわざを見る時に、私たちがこの神に言えることはただ一つです。「神さま、感謝します。神さま、ありがとうございます。私のような者をこのようにあわれんでくださり、このようすばらしい救いという贈り物を与えてくださった。」と。

主は私たちに、新しく生まれ変わるといふ「新生」と「永遠のいのち」を与えてくださいました。皆さんもよくご存じですが、この救いは主なる神からの一方的な贈り物です。前回も見ましたが、パウロがテモテへの手紙第二の中で、この神の恵みに関してこのように語りました。1:9-10「神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。…」、今私たちがローマ人への手紙で見ているように、ここでもパウロは私たちに教えてくれます。「今あなたが永遠のいのちをいただいて、そして、喜びを持って生きて行くことが出来るのは、すべて神からの恵みだ。神がこの祝福にあなたを招き入れようと計画して下さっていた。」と、全く驚くべきことです。しかもこう続きます。「この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、」、つまり、あなたがこの祝福に与るといふことは、神が突然お決めになったのではなくて、永遠の昔から決めておられた、この世界が創造される前から、あなたが生まれる前から、神はあなたを選んでくださっていたというのです。10節にこのように続きます。

「それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現われによって明らかにされたのです。…」、救い主が来てくださった、そして、救いを与えてくださった、そして、そのことによって、確かに、私たちが世界が造られる永遠の昔から選ばれていたことが明らかになったのです。「キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。」、イエスが為さったことは、自らのその死をもって、私たちがどうすることも出来なかったこの死という敵の力を完全に無効とされたのです。

確かに、私たちは肉体的に死にます。でも、かつて生まれながらに霊的に死んでいた私たちにとってこの死は無縁のものとなりました。私たちは神と和解させていただき、神のいのちをいただき、現に今日生きています。しかも、この方とともに永遠に生きることが出来るのです。イエス・キリストによって私たちの敵は滅ぼされたのです。イエス・キリストによって私たちは勝利者として組み入れられたのです。イエス・キリストによって私たちは確かに永遠の希望を持って今日生きる者とされたのです。今も私たちは神の恵みをいただきながら感謝しながら生きています。しかし、先ほど見たように、ファニ

ー・クロスビーがなぜ死を待望し死を喜んでいたのか？私たちはイエスにお会いしたとき、私たちを愛し、世界を造る前から私たちを選んでくださっていた神にお会いしたとき、私たちはイエスの御顔を拝して、その方を心から誉め称えるのです。しかも永遠に。神はすばらしい祝福を私たちに提供してくださった。パウロはそのすばらしい神の恵みを、このみことばを通して繰り返し教えてくれています。

前回、私たちが見た5節に「**今も、恵みの選びによって残された者がいます。**」とあるように、どの時代を見ても、神がご自分の意志をもってある人々を選ばれている、神がご自身のご計画に基づいてある人々を選ばれた、すべて神の為さったわざです。私たちが何かをしたからではないし、私たちが他の人に比べて特別だからではありません。神がそのように選ばれたのです。こんなに罪深い私たちを、どうしようもない私たちを神が一方的に選んでくださったのです。パウロはそのことを繰り返すのです。神が選ばれる。そして、神にはその権利があるのです。この方はすべてのものをお造りなされた主権者なる神です。すべてのものはこの方によって造られたのです。そして、この方のみこころだけが常に為されて来たり、これからも為されて行くのです。

★イスラエルについて

A. イスラエルの失敗 : イスラエルは追い求めていたものを獲得できなかった 7 a 節

さて、恵みの話をするパウロですが、7節を見ると、イスラエルについてこのようなことを述べています。「では、どうなるのでしょうか。イスラエルは追い求めていたものを獲得できませんでした。」と、パウロは「神の選び」に関して話をしているのですが、このイスラエルに関して言うなら、彼らは大きな失敗をしたと言うのです。どんな失敗でしょう？自分たちが追い求めていたものを獲得できなかったというのです。では、彼らは何を追い求めていたのでしょうか？イスラエルはいったい何を得ようと努力していたのでしょうか？

*イスラエルが追い求めていたものとは？

a) 救い、神の義

ひとと言えうなら、それは「救い」です。彼らは救われることを求めて、そして、それを一生懸命追い求めていたのです。「救い」、別の言い方をすれば「神の義」です。9：30-32でパウロが教えた通りです。「では、どういうことになりますか。義を追い求めなかった異邦人は義を得ました。すなわち、信仰による義です。：31しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めながら、その律法に到達しませんでした。」

「義」、正しさ、正義です。正しい正義なる神の前に立つには、私たちもその正しさ、正義をいただくことが必要です。そうでなければ、その方の前に立つことはできません。この正しさ、正義をいただいていない人はどのような人ですか？汚れた者たち、正しくない者たちです。正義ではなく不義を身にまとっている者たちです。そのすべては神の前にさばかれる存在であり、だれ一人としてその様な状態で聖い正しい神の前に立つことはできません。なぜなら、この聖い正しい神は、いかなる罪もいかなる汚れも憎んでおられるからです。ですから、この方の前に立つことができるのは、この方によって聖く正しくされた者たちだけです。パウロは言います。「イスラエルは義の律法を追い求めた」と。彼らが考えたことは、律法というものは私たちに義をもたらしてくれる手段であるということです。律法を追究すれば、結果的に、私たちはこの義を手にすることができる、つまり、救いを得ることができると彼らは考えました。

しかし、パウロが言うように「その律法に到達しなかった」。つまり、律法が約束していたものを彼らは獲得することが出来なかったと言ったのです。確かに、律法をすべて完璧に守ることができるなら「救い」をいただきます。「義」をいただきます。しかし、残念ながら、それを行なうことのできる人間はどこにもいません。そして、皆さんもよくご存じのように、律法が与えられたのは、私たちがそれを守り行なうことができないことを私たちに悟らせるためでした。神は最初からご存じです。私たちがそれを守ることができないことを…。私たちが知らなかったのです。イスラエルの民はその律法に対して、自分たちはそれを守ることが出来ると思ひ、また、自分たちは守っていると思っていたのです。備えられている神の助けを彼らは全く無視して、そして、自分たちの力で、自分たちの努力でもって、この神の義を得ることができると彼らは考えていたのです。

その結果、彼らは到達しなかったのです。求めていた義、救いを得ることがなかったのです。32節に続きます。「なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行ないによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです。」、彼らの問題はそこにあったのです。つまり、信仰ではなく自分たちの行ないによって、この義を得ようとしたのです。もうすでに私たちが学んできた通りです。

b) 神に対する熱心さ

もう一つ付け加えるなら、10章2節からパウロが言うように、彼らは神に対して非常に熱心だった

ことです。私たちはその点は認めます。しかし、残念なことは、その熱心さは自分を満足させても、主なる神を決して満足させることがなかったことです。なぜなら、私たちの周りには、自分の信じているものに対して非常に熱心な人々がいるからです。問題は、それが神に喜ばれることかどうかです。どれ程自分たちを喜ばせることをしても、神を喜ばせることがなければ、神からの祝福はそこにはありません。まして、神でないものに対して熱心に歩んでいるなら、神の祝福を得ることは不可能であることは明らかです。ですから、このイスラエルの民の問題は、彼らが律法を行なうことによって救いを得ることができると考え、そのために一生懸命努力をして、自分たちは神の義をすでに与えていただいていると考えていたことです。

彼らの熱心さは主のみこころに沿ったものではありませんでした。自分たちに満足をもたらすだけのものでした。ですから、10:4に「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。」とあります。イエスが来られ、イエスが十字架で死なれることによって、神の義を達成する手段としての律法は終わったということです。イエスが十字架に架かってくださることによって、このイエス・キリストを信じる信仰によってのみ救いが与えられるということを明らかにしたのです。そのことをパウロは私たちに教えてくれたのです。パウロが私たちに言うことは、この時代も今の私たちも同じでしょう。私たちがある宗教にどんなに熱心でも、私たちの努力によって神のご好意をいただくことはあり得ないということです。「これだけやった！」と自負できるかもしれませんが、問題は神ご自身が罪を犯している私たちの行為を見て喜んでおられるかどうかです。

ですから、皆さんもこのようにみことばを学んで確信されたことは、人間の宗教、作り出した宗教には救いはないということです。どんなに熱心でもイエス・キリストが律法を終わらせたのです。イエス・キリストだけが、私たちにこのすばらしい救いをもたらしてくださる方です。イスラエルは一生懸命熱心にこの義、救いを求めました。しかし、彼らは獲得することができなかったと言うのです。それに関して、この後、このようなことが続きます。

B. 神のみわざ 7b-10節

1. 「選ばれた」 — 「獲得した」

7節の後半「選ばれた者は獲得しましたが、他の者は、かたくなにされたのです。」と、イスラエルの失敗を述べたパウロは、次に、7節から10節まで「神のみわざ」へと話を展開して行きます。恐らく、皆さんもこの箇所を読んで、イスラエルは救いを願い求めていたのにその救いを得ることがなかった、神に選ばれた者は救いを得、選ばれていなかった者は救いを得なかったということをパウロが言っていると思われるでしょう。しかし、パウロはそのようには書いていません。パウロは「選ばれた者は獲得しましたが、他の者は、かたくなにされたのです。」と言っています。

2. 「かたくなにされた」 — 「獲得しなかった」

つまり、パウロはここで「かたくなにされた」ということに強調をおいているのです。選ばれた者はこのすばらしい救いに与っているが、そうでない者は与っていない、ある者は信仰によってこの救いを受け入れるが、ある者はそれを拒むと。それは明らかです。しかし、パウロは敢えてここで「かたくなにされた」ということばを使っています。しかも、これは受動態を使っています。受け身です。だれかによってそのようにされたのかということです。だれかが彼らの心をかたくなにしたということです。もちろん、この文脈から見ると、神がそのことを為さったのです。このように言うと、皆さんの多くは、かたくなにした神にさばきの責任があるように思ってしまう。私たちはいろいろな箇所ですべてそのことを見て来ました。なぜなら、神はある人を救いに導き、ある人をかたくなにしたのですから、かたくなにしたその責任は神にあるから、ある人たちがさばかれるときに、そのさばきの責任は神にあるのではないか、神がそのように為さったのだからと言います。確かに、そのように考えるのはもっともです。でも、パウロは敢えてこのことばを使うことによって、神の恵みを教えようとするのです。この「かたくなにされた」ということに関して、この後パウロは、特に、旧約聖書のみことばを引用しながらその説明を加えて行きます。

(1) 「かたくな」とは？ 8-10節

「かたくな」ということばは「皮膚が硬結する」という意味です。皮膚が硬くなってしまふ、繰り返してその部分を圧迫したり摩擦すると、その部分が角質化して堅くなってしまふ。「たこが出来る」と言いますが、例えば、ペンを持ち続けていると「ペンだこ」が出来る、そういうことです。そのことばがここで使われているのです。パウロは旧約聖書のみことばを使いながら、それがどういう状態なのかということをお教えしてくれます。

a) 霊的眠りをもたらした 8節

8節を見ると「こう書かれているとおりです。「神は、彼らに鈍い心と見えない目と聞こえない耳を与えられ

た。今日に至るまで。」とあります。靈的眠り、靈的に眠ってしまっている状態であると言います。申命記29：4のみことばから、パウロは特にこのことを教えています。「しかし、主は今日に至るまで、あなたがたに、悟る心と、見る目と、聞く耳を、下さらなかった。」、また、イザヤ書6：10にも「この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の心で悟り、立ち返って、いやされることのないために。」と記されています。

神が何を為さったのでしょうか？この獲得できなかった者たち、かたくなにされた者たち、彼らに「鈍い心」、「見えない目」と「聞こえない耳」を与えたと言うのです。

- ・鈍い心＝無感覚、無反応、知覚が麻痺している、という意味です。ですから、この人の状態は、何を聞いても無感覚、丁度、そのペンだこができた堅い部分をさわってみてください。堅くなっているので何も感じません。まさにそういう状態なのです。神のすばらしさを聞いてもその心は無反応なのです。麻痺してしまっているのです。

- ・見えない目＝確かに、肉体の目は開いていても心の目は閉ざされているのです。ですから、神のすばらしさを見ることはできません。

- ・聞こえない耳＝耳は確かに聞こえていても、神のすばらしさを理解することができないのです。

そのように、靈的に全く眠ってしまった状態に人々は陥ったと言います。また、「今日に至るまで。」とパウロは言っていますが、その時代だけでなく、かなり昔から継続して彼らはこのような状態にあるということを言っています。

b) 神のさばき 9-10節

9節からは「さばき」のことが記されています。9節「**ダビデもこう言います。「彼らの食卓は、彼らにとってわなとなり、網となり、つまずきとなり、報いとなれ。」**」、ここは詩篇69篇のみことばを引用しています。69：22「**彼らの前の食卓はわなとなれ。彼らが栄えるときには、それが落とし穴となれ。」**と。

- ・食卓はわなとなれ9節＝なぜ、食卓のことが出て来るのでしょうか？ダビデが食卓を上げたのは、食卓を囲んでいるときは祝福のときだからです。そこには満足がありすばらしい感謝があります。私たちはそのような状態を描きます。その食卓が「わなとなり、網となり、つまずきとなり、報いとなれ。」と、つまり、祝福とまったく逆のことをダビデはここで言っているのです。

- ・網となり9節＝何かを捕まえるため、獲物を捕るための網のことです。

- ・つまずく9節＝罪の原因となってしまう。

ですから、この三つのことばが表現していることは、祝福ではなくて、大変な苦しみがあるということです。想像してください。網によって捕らえられた動物のことを。そこから逃げ出すことができないでいる状態です。その一つひとつのことばが大切なのではなく、ダビデがここで言わんとした状態、本来なら、食卓は豊かな祝福を楽しむべき所です。でも、それと全く逆の状態が自分の身に襲っているということです。喜びの場所であるはずの食卓が悲しみと苦しみの場所となっていると言うのです。まさに、神のさばきのことばです。

- ・報いとなれ9節＝この「報い」とは「賠償、償い」という意味があります。つまり、ダビデがここで言っていることは、神が彼らの罪に対して「さばき」という報いをくださるということです。

そして、10節に「**その目はくらんで見えなくなり、その背はいつまでもかがんでおれ。」**とありますが、これも詩篇69：23の引用です。「**彼らの目は暗くなって、見えなくなれ。彼らの腰をいつもよろけさせてください。」**

- ・目はくらんで見えなくなれ10節：目がかすんで暗くなって、物事がはっきり見えない状態です。

- ・背はいつまでもかがんでおれ10節：いつまでも継続してそのような状態が続くのです。この「かがんでいる」とは、私たちもそのように腰が曲がった状態の人を見かけたことがあります。ここではダビデは詳しい説明をしていますが、ジョン・マレーという神学者は「これは重い荷物で背が曲がっている奴隷のその束縛状態のことを描いているのか、それとも、苦悩によって、特に、恐怖の苦悩によって腰をかがめている状態が言われているのか、そのどちらかだろう。」と言います。恐怖の苦しみ、これから自分の身に起こってくる恐怖に対する苦悩がこのような姿にしているのではないかと言うのです。

いずれにせよ、ダビデがここで言わんとしたこと、そして、パウロがこのダビデのことばを引用して言わんとしていることは、「神のさばきが下る」ということです。食卓が祝福の場でなくなってしまう。そして、奴隷の状態にあるのか、それとも、様々な恐怖がそのような姿を取らせるのか、いずれにしろ、祝福ではなくて、その人の内に大変なさばきが下ると言うのです。

* どうして「かたくなにされたのか」？

もう一度、9節の最後の「報いとなれ」ということばを見ると、先にも少し説明しましたが、「賠償、

償い」であると同時に、これは「悪に対するさばき、その罪に対する罰」です。ですから、明らかにダビデがここで言わんとしていることは、このよう状態に陥ったのは彼ら自身の罪が原因であるということです。それを踏まえた上で、私たちはこの「かたくなにされた」ということばを考える時に、確かに、神によってそのようなことが為された、しかし、よく見て行くと、その原因は人間の側にある、人間のその選択がそのような状態を自分の身に招いてしまったということが明らかです。

実際に、皆さん、モーセがエジプトに行ってパロに対して「私の民を行かせなさい」と言った時に、「神がパロの心をかたくなにした」と記されている箇所が幾つかあります。

神がかたくなにした

出エジプト 4 : 21 = 「主はモーセに仰せられた。「エジプトに帰って行ったら、わたしがあなたの手に授けた不思議を、ことごとく心に留め、それをパロの前で行なえ。しかし、わたしは彼の心をかたくなにする。彼は民を去らせないであろう。」

9 : 12 = 「しかし、主はパロの心をかたくなにされ、彼はふたりの言うことを聞き入れなかった。主がモーセに言われたとおりでである。」

10 : 1 = 「主はモーセに仰せられた。「パロのところに行け。わたしは彼とその家臣たちを強情にした。それは、わたしがわたしのこれらのしるしを彼らの中に、行なうためであり、」

10 : 20 = 「しかし主がパロの心をかたくなにされたので、彼はイスラエル人を行かせなかった。」

パロがかたくなになった

同時に、このようにも記されています。

8 : 15 = 「ところが、パロは息つく暇のできたのを見て、強情になり、彼らの言うことを聞き入れなかった。主の言われたとおりでである。」

8 : 32 = 「しかし、パロはこのときも強情になり、民を行かせなかった。」

9 : 34 = 「パロは雨と雹と雷がやんだのを見たとき、またも罪を犯し、彼とその家臣たちは強情になった。」

つまり、みことばが教えていることは、確かに、神がパロの心をかたくなにしたのですが、同時に、彼ら自身が神の前に心を閉ざすことを選択したということです。つまり、人間がそのような選択をし続けるがゆえに、神はそれを許されるということです。人間が神の恵みに対して心を開こうとしないがゆえに、神はそれを良しとされるのです。

ということは、イエスを知らない方がイエスの話を聞きます。もう一歩下がって、教会に来ていない人も神がお造りになったこの自然界の中で生きています。すでに、私たちがローマ書で見て来たように、「彼らに弁解の余地はないのです。」（1 : 20）。なぜなら、神がお造りになったものは、神ご自身を明らかにしているからです。しかし、私たちがその神を求めようもしないし、神を追究しようもしないのです。神に問題はないのです。私たちがそのような選択をしないのです。教会に来て、神の福音のメッセージを聞きました。でも、どうしてその人が神の前に正しくなろうとしないのでしょうか？神のせいですか？自分がそのような選択をするのです。イエスを信じた後も私たちはそうではないですか？神が何を望んでおられるのかを知っています。でも、そのみこころに従って生きて行くか行かないかは自分が決める訳です。神のせいにはできないのです。

私たちはメッセージを聞いた時に、そこに当然、責任が生じていることを知っています。どのような道を選ぶのか、どのように生きて行くのか、それは私たち自身が決めることです。そして、私たちが分かっていることは、自然界だけを見た人々も、教会に来てキリストの福音を聞いた人々も、神に逆らい続けているという現状の中にいるなら、その人たちは自らの意志でもってその選択をし、その選択の中を生きていくということです。だれ一人として「主が私を信じさせないようにしている」などと言えないのです。「私の不信仰は神のせいです」とは言えないのです。「私が神に逆らうのは神のせいです」と言える人などどこにもいないのです。すべて私たちの選択なのです。

私たち一人ひとり、倫理的に責任を持っています。自らの罪に関してその責任があるだけでなく、その罪に対して私たちは「さばき」を受けなければならない存在なのです。ですから、はっきりしていることは、神はイスラエルの民の叫びを聞いて、イスラエルの民をあのエジプトの地から解放すると言いました。そして、神のすばらしいみわざを見せました。しかし、それを見ていながらパロはそれに対して心を開こうとしなかったのです。そのような選択したパロに対して神は、彼自身がしたいこと、彼の心をかたくなにするという選択を許されたのです。そして、その結果、どうなって行くのか？今日、私たちが見て来たように、神の前にそのような選択をする者たちは、益々、その心はかたくなになって行くのです。「たこ」がどんどん大きくなって行くのです。無感覚の部分がどんどん大きくなって行くのです。そうなると、何を聞いても、神のすばらしい恵みを聞いても、そのすばらしさが全く分からないという、そのような状態に陥って行くと言うのです。目が開いていても心の目が閉ざされている、耳が

開いていても心の耳は閉ざされている、神のすばらしさを理解することができないと、なぜ、そのようなことに陥って行くのでしょうか？神のせいではないのです。私たちが正しい選択をしないからです。

しかし、感謝なことに、神はそのような中にも罪人を愛してくださっているのです。そのような罪人に対して救いの御手を伸ばしてくださっているのです。パウロはこのみことばを通して、イスラエルのかたくなさを教えました。彼らは様々な形で神を知ることができました。彼らは神によって選ばれた民でした。特別な特権が与えられていました。しかし、彼らは神のメッセージに従おうとするのではなくて、自分たちで神の義を立てようとしたのです。そして、神の教えに背いたのです。確かに、熱心でした。でも、彼らの熱心は真理に基づいていなかったのです。パウロはそのことを言ったのです。そして、彼らはかたくなにされたのです。メッセージを聞いても聞いても、神のみわざを見ても見ても、彼らが自らの選択で神に対して心を開こうとしなかったのです。それゆえに、神は彼らに「かたくなになること」を許されるのです。

最初に話したように、「神の恵み、神の愛」は神からの一方的な贈り物です。なぜなら、そのようなかたくなに心を閉ざすという選択をしている者たちに対して、神はなおも彼らに忍耐をもって救いの御手を差し伸べてくださっているからです。

* 今日に至るまで

先ほども触れましたが、8節に「今日に至るまで。」とあります。8節のみことばはモーセの時代のことです。パウロがこの手紙を書いた1400年以上も前の話です。モーセの時代にモーセが言うのです。「人々の心は堅くなる」と。そして、そのことばを引き合いに出してパウロは言います。「それは今も変わっていない」と。人間とは悲しいものです。どこの国にあらうと、人種がどうあらうと、国籍がどうあらうと、人間の本質的な問題がここにあります。私たちは神を信じたくないのです。神に従って行きたくないのです。神よりも他のものを愛したいのです。「今日に至るまで」、今日まで、このような状態が続いていると言うのです。

でも、パウロはそれが終わりを告げることを知っています。ローマ11:25を見てください。「兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思えないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、」とあります。神のすばらしい恵みだと思いませんか？神はまだ、このかたくななイスラエルに対してすばらしい計画を持っておられるのです。必ず、そのかたくなさが砕かれるときがやって来るのです。神がその心に働いてくださるのです。このようなイスラエルに対して神はこのような愛をもって接し続けてくださるのです。

結論:

今日のまとめです。私たちの周りにも、悲しいことに、心をかたくなにしている人たちがたくさんいます。私たちの愛する家族はどうですか？友人たちはどうですか？皆さんの中にはそのような人たちに伝道することを諦めてしまっているかもしれません。しかし、私たちが言えることは、神はそのようなかたくなな心を砕いてくださることが可能だということです。

パウロはどうしましたか？パウロはこのかたくななイスラエルの人々に対して、どこにでも出て行って彼らに福音を語り続けるのです。神がそのかたくなな心を砕いてくださることを信じて。私たちも同じです。相手がどのような状態にあっても、私たちの責任は彼らにこの救いのメッセージを語り続けて行くことです。祈りをもって…。

そして、同時に、みことばの約束があります。今日に至るまで、このイスラエルの民は心をかたくなにしています。しかし、かたくなにされているイスラエル、そのような状態のイスラエルがその状態から解放される時がやって来ます。その日が近づいているのです、皆さん。ということは、私たちはその前に、その日が来るまでにしなければいけないことがたくさんあるのです。「救いのメッセージを語り続けて行く」というその責任、その務めです。

パウロが言ったように「異邦人の完成のなる時まで」、そのときまで、私たちは一人でも多くの異邦人が、もちろん、イスラエル人もそうですが、この救いに与るように福音を語り続けるというメッセージをいただきました。その命令をいただいたのです。どんなにかたくなな人であっても、私たちは祈りながら福音を語り続けて行きます。時が迫っているからです。異邦人の完成の時が近づいているから、私たちはその時がやって来るまでに、私たちに与えられているこの福音宣教に励み続けて行くことです。そのことを今私たちが覚えなければいけないことだと確信します。

信仰者の皆さん、神はどんなことでもお出来になる方です。かたくなな心を望むなら、神はそれを良しとされます。そうしてイスラエルはかたくなな心をもって歩み続けて来ました。しかし、同時に、私たちが確信することは、私たちの神はそのような心をも変えてくださる神だということです。希望を失

わないように、この福音のメッセージを語り続けて行くことです。私たちの神は「恵みと愛に満ち溢れた」お方です。あなたを選んでくださった、救ってくださった、そして、そのメッセージを語る者として使ってください。そのことを感謝して、メッセージを語り続けてください。

適応：

- ・その日が早く訪れて、神の計画が為されることを祈る。
- ・その日までの時間が日々短くなっている。伝道に励むこと。

考えましょう：

1. 人間が生み出した宗教によっては、罪の赦しを得ることがないのはどうしてでしょう？
2. 信仰によってのみ罪が赦されるのはどうしてですか？
3. 罪が赦されたことはどのようにして分かりますか？
4. 主イエス以外によって罪の赦しを得ることは可能ですか？ それはどうしてですか？